

エリーズ・フレネについて

—フレネ教育における子どもの芸術的表現活動の開拓者—

秋好 文子・田中 修二

Sur Élise Freinet

—Pionnière de l'Expression Artistique Enfantine dans la Pédagogie Freinet—

AKIYOSHI, Ayako and TANAKA, Shuji

大分大学教育学部研究紀要 第40巻第2号

2019年3月 別刷

Reprinted From

RESEARCH BULLETIN OF THE

FACULTY OF EDUCATION

OITA UNIVERSITY

Vol. 40, No.2, March 2019

OITA, JAPAN

エリーズ・フレネについて

—フレネ教育における子どもの芸術的表現活動の開拓者—

秋好文子*・田中修二**

【要旨】 エリーズ・フレネ *Élise Freinet* (1898-1983) はフランス人女性教師であり、フレネ教育の創設者セレスタン・フレネ *Célestin Freinet* (1896-1966) の妻である。彼女は画家でもあり、教育における子どもの自発的な表現の重要性を理解していた。1959年に創刊した子どもの芸術に関する雑誌 *Art enfantin* 『アール・アンファンタン』には、その芸術観や子どもに対する教育観が色濃く反映されている。彼女は子どもの *Expression libre* (自由な表現) に着目し、日常的な実践としての *Dessin libre* (自由な描画) の独創性を尊重した。フレネ教育では、子どもは *Méthode naturelle* (自然な方法) と呼ばれる実践によって、生活に根ざした活動を通して創造性が育まれ、人間形成がなされるとしている。エリーズはセレスタンを伴侶として支えたばかりでなく、フレネ教育のなかで子どもの芸術的表現の領域をしっかりと位置づけ、教育運動の推進に貢献したのである。

【キーワード】 フレネ教育 エリーズ・フレネ セレスタン・フレネ
新教育 フレネ学校

I はじめに

創設者セレスタン・フレネ *Célestin Freinet* (1896-1966) の名前が冠された「フレネ教育」とは、19世紀末から世界各地で始まった新教育運動の流れをくむ、子どもを主体とした教育思想と教育実践のひとつである。彼とその妻エリーズ *Élise Freinet* (1898-1983) [図1] は、1935年に私立の *École Freinet* (フレネ学校) を南仏ヴァンス *Vence* に開校し、47年にはフレネ教育の拠点となる *Institut Coopératif de l'École Moderne* (ICEM, 現代学校協同研究所) を設立した。

画家であり、フレネ教育における芸術活動の充実に大きく貢献したエリーズの足跡は、運動の黎明期である1920年代から、普及の一翼を担った出版物に挿絵として多数残されており、彼女の版画《鋸打つ人》[図2] は、今も ICEM のエンブレムとしてホームページなどで使用

平成30年10月31日受理

*あきよし・あやこ 大分大学大学院教育学研究科教科教育専攻美術教育専修修了

**たなか・しゅうじ 大分大学教育学部芸術・保健体育教育講座(美術史)



図1 フレネ学校のエリーズと子どもたち
(出典：M. Freinet, *Élise et Célestin Freinet*)

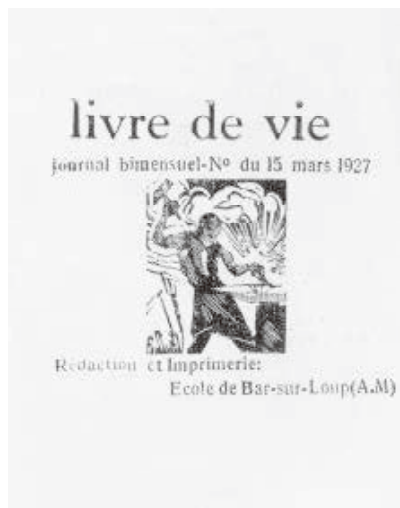


図2 『生活の本』1927年3月15日号
(出典：M. Freinet, *Élise et Célestin Freinet*)

されている。彼女は59年に子どもたちの作品をとりあげた雑誌 *Art enfantin* 『アール・アンファンタン (子どもの芸術)』を創刊し、フレネ教育の代表的な記録資料 *Naissance d'une pédagogie populaire* 『民衆的教育学の誕生』(F. Maspero, 1949)をはじめ多くの著作をのこしている。にもかかわらず、フレネ教育が世界各地で研究対象となり、セレストンの文献や研究資料が容易に入手できるのとは対照的に、エリーズ本人についての資料は僅かである。こうしたエリーズへの関心が低いことに対する疑問が、本考究にとりくむ動機となった。

本論はそれらの数少ない資料を精査し、エリーズの生涯とフレネ教育における足跡に光を当てることで、彼女が果たした役割と実像を解明することを試みるものである。

II エリーズ・フレネとフレネ教育

エリーズの一生を知る最も重要な手がかりは、彼女の娘マドレーヌ Madeleine Freinet の著わした *Élise et Célestin Freinet: Souvenirs de notre vie, tome I, 1896-1940* 『エリーズとセレストン・フレネ——わたしたちの思い出 第1巻 1896-1940年』(Stock, 1997)である。以下の叙述の大部分はそれを拠りどころとしている¹⁾。

1 出生から結婚まで (1898～1926年)

彼女は、エリーズ・ラジエ＝ブルノ *Élise Lagier-Bruno* として、フランス南東部の標高1,000メートル以上の山岳地方に位置する小さな町、オート＝アルプ *Hautes-Alpes* 県のペルヴォ *Pelvoux* で1898年8月14日に生まれた。母ジュリー *Julie* と父クロード *Claud* はともに公立小学校教師で、同じく教師となる姉マリー＝ルイズ *Marie-Luise* と兄フェルナンド *Fernand* のほか、ルシアン *Lucien*、マドレーヌ *Madeleine*、フランセット *Francette* の弟妹

がいた。母は 70 年生まれで、その両親はオート＝アルプの高地に位置する村の貧しい農民であった。経済的に苦勞の多い境遇ながら、この時代に女性として教職に就いたという逞しさの影響が、エリーズに大きく及んでいる。66 年生まれの父クロードは、同じ地方のヴァルイーズ Vallouise で、両親ともに厳格なカトリック信者である農家に生まれた。彼は強い愛国心の持ち主で、エリーズが 11 歳の頃にフランスを象徴する女性像マリアンヌとフランス国旗を描いたのを見て喜んだというエピソードが残っている。

第 1 次世界大戦が始まった 2 年後の 1916 年、18 歳のエリーズはギャップ Gap の師範学校に姉と兄に続いて入学し、19 年に卒業した。実習教諭として僻地 ヴィヤール＝ダレーヌ Villard-d'Arène に赴任したのち、同じ地方のいくつかの職場環境が劣悪な学校に勤務するなかで、彼女はたびたび視学官らに手紙を送り、自らの権利を守ることを学んだ。22 年春にはサン＝マルグリット Saint-Marguerite に転任し、この時期から教師の組合を介して政治的集会に参加した。第 1 次世界大戦に従軍した兄の影響もあって戦争に批判的であった彼女は、社会主義あるいは共産主義的思想に惹かれていった。

1920 年、エリーズはエコール・アーベールセー École ABC (パリにある美術学校の通信教育) に登録してデッサンを学びはじめ、3 年後には学内のコンクールで 2 等賞を受賞した²⁾。その喜びを弟ルシアンに伝える手紙は、「私は美術の世界で有名になりたい (Je veux donner à l'art une place importante.)」(Madeleine, p.98) という強い意欲に溢れたものである。その年の夏には妹の住むパリをはじめ訪れてルーヴル美術館など多くの美術館や展覧会を見てまわり、25 年秋からはしばらく滞在してルネフェール Renéfer のもとで版画を学び、翌年 1 月には美術教室に通った。「美術とは、写真のように再現することではなく、自然を理解することです (L'art, c'est la compréhension de la nature, mais ce n'en est pas la photographie.)」(Madeleine, p.116) という彼女の言葉からは、その表現に対する姿勢が垣間見られる。

1923 年、彼女はすでに文通を始めていたセレスタンの学校文集の挿絵を引き受けている。文通のきっかけは、16 年に小説 *Le Feu* 『砲火』を出版し(同書の挿絵はルネフェールによる)、反戦平和を主張した作家バルビュス Henri Barbusse が 19 年 7 月に発刊した雑誌 *Clarté* 『クラルテ』に、彼の論文が掲載されたことであった。その教育の理解者でもあったバルビュスの活動を通して知り合った 2 人は、25 年 8 月グルノーブル駅の待合室で初めて対面して語りあい、互いに好意を持つにいたる。そして翌年 3 月 5 日、兄のフェルナンド夫婦の住むヴェーヌ Veynes に家族が一堂に会して、ささやかな結婚式があげられた。彼女の望んだ「つつましく、きちんとした生活 (une vie simple et ordonnée)」(Madeleine, p.119) ではなく、予想もしていない人生がはじまったのである。

2 フレネ教育

セレスタン・フレネは、南仏のアルプ＝マリタイム Alpes-Maritimes 県の山岳地方にあるガ Gars 村で農業と牧畜を営む家に 1896 年に生まれた。1913 年ニースの師範学校に入学後、翌年勃発した第 1 次世界大戦に応召するが、数ヶ月後に爆撃で肺に重傷を負い、4 年の療養生活を余儀なくされた。20 年に彼は完全な回復にいたらぬまま出生地と同じ県にあるル・パール＝シュル＝ルー Le Bar-sur-Loup の公立小学校に着任し、男児 35 名のクラスを担当した。

健康上の理由から、子どもたちを大声で統率する従来のやり方ができなかった彼は、子ども



図 3 現在のフレネ学校での活字と印刷機（奥）

一人ひとりを観察し、クラスの全員が適応できる教育方法の探究をはじめ。ルソー Jean-Jacques Rousseau やペスタロッチ Johann Heinrich Pestalozzi といった先駆者たちの教育思想や、スイスの教育学者フェリエール Adolphe Ferrière ら同時代の新教育運動の実践を研究するなかで、彼は教室の教壇を撤去し、教科書を用いず、子どもを主体として生活に根ざした教育、子どもの自発性と相互のコミュニケーションを

大切にする独自の教育を作り上げていった。

その最初の試みが、子どもたちが自分の身近な出来事や事柄をテーマにしてとりくむ、「Texte libre 自由な作文」であった。そのために彼らを学校の外に連れ出し、身の回りにある畑や野山を歩き、職人たちの作業を見るといった「Promenade 散歩」を行い、それは「Étude du milieu local 地域の研究」の実践へと発展した。さらにそこで子どもたちの関心と学ぶことをつなげる方法として、1923年に「Imprimerie 印刷設備」を導入する。子どもたちは自分の書いた文章の活字を一つひとつ拾い並べて印刷機で刷り〔図3〕、それらを束ねて *Livre de Vie* 『生活の本』と題された学校文集にする。その小冊子が子どもたちの家族に届けられ、地元の人びとの手にも渡っていった。その文集はやがてフランス国内の他の小学校との学校間通信文集 *Les échanges interscolaires* へと発展し、さらに子どもの文章による子どものための文集 *La Gerbe* 『束』が定期的に刊行されることとなった。

こうした散歩から文集の印刷までの一連の流れを、セレスタンは「Travail 仕事」と名付けたが、そのなかで「自由な作文」とともに実践されたのが「Dessin libre 自由な描画」であり、それもまたリノリウム版画などで複製され、文集に収められた。子どもが想いのままに描いた描画からは新たに言葉が引き出され、詩や文章を導き、一方で言葉が描画にひらめきを与える。両者が調和することで、子どもの豊かな創造性が表現されるのである。これらを含めた子どもの芸術の領域に、エリーズが深く関わっていたのはまちがいない。

3 ル・パール＝シュル＝ルーからサン＝ポールの時代（1926～1935年）

1926年3月11日、結婚したエリーズはセレスタンとともにル・パール＝シュル＝ルーに到着する。セレスタンの受けもつ子どもたちと教室の印象を、彼女は「その小さな学級は活気にあふれていて、まるで巣箱に集まる蜂のようであった（*La petite classe est bourdonnante d'activité, comme une ruche.*）」（*Madeleine*, p.48）と記している。

同年7月4日、フランスの全国紙 *Le Temps* 『ル・タン』の第一面に「A l'école de Gutenberg（グーテンベルグの学校では）」という見出しで、彼の印刷機を使用する教育実践が好意的に紹介された。いくつもの新聞社がそれにつづき、フレネ教育は広く知られるところとなった。学校間通信文集に参加する小学校も増え、一口25フランの基金により印刷機や道具類を購入する協同組合方式が開始され、1926年7月に雑誌 *L'Imprimerie à l'École* 『学校の印刷』（32

年 10 月に *L'Éducateur Prolétarien* 『プロレタリアの教育者』に改題) を発刊するなど、その活動は充実していく。しかしその資金は十分ではなく、そのためにエリーズは教員のポストを求めていたが、願いはかなえられないままであった。

そうした状況のなか、1927 年に彼女は小説家ジルベール Marion Gilbert の小説 *Le Joug* 『束縛』(J. Ferenczi et fils, Éditeurs, 1927) の挿絵の木版画〔図 4〕によりドレ賞を受賞し、賞金 5000 フランを受け

取った。版画家ドレ Gustave Doré の名前を冠した同賞は、Le cours ABC (ABC 講座, エリーズが通信教育を受けた École ABC のこと) と月刊誌 *ABC, magazine d'art* 『ABC 美術画報』が主催したもので、次点には後年サロン・ドートンヌ会員となるプティジャン Armand Petitjean の名前があがっている³⁾。貧しく厳しい農村生活を切りとった情感豊かな彼女の受賞作は、プロレタリア美術の香りが強く漂うものであった。

1927 年 1 月、セレスタンは著書 *L'Imprimerie à l'École* 『学校の印刷』を出版し、それによりフレネ教育はさらに広く認知された。翌年、30 名ほどの参加者によるパリでの会議において、La Coopérative de l'Enseignement Laïc (CEL, 非宗教教育協同組合) が組織化され、組合員は 100 名を数えた。資金面の必要からますますエリーズの復職が直近の問題となったが、結局、近隣にポストは望めず、彼らは新たな勤務校を求めて転居の決心をする。

1928 年の新学期、セレスタンはニースの西方 20km ほどのところにある静かな村サン＝ポール Saint-Paul の公立小学校に赴任した。古い城壁に囲まれた石造りの家々や、南仏特有の果樹の緑におおわれた情景は 2 人を魅了したが、教会のある一区画に建つ古い屋舎を利用した学校の教室は、壊れかけの教卓と剥がれた床板が放置され、壁には満足な棚もなかった。それでも独自の教育は着実に実践され、翌 29 年 8 月 8 日にはエリーズがひとり娘であるマドレーヌを出産し、その年の 10 月からサン＝ポールの女子小学校に勤めはじめた。

この頃 2 人は子どもが学習に利用する「Fichier scolaire 学習カード」を考案する。集めた資料を貼り、調べたものを書き込むハガキほどの大きさの厚紙である。これらが数年後、CEL によって一揃え 500 枚の「Fichier scolaire coopératif 協同学習カード」となる。さらにそれらのカードをテーマごとに分類整理して、冊子状にまとめたものを *Bibliothèque de Travail* (BT) 『仕事の文庫』と命名し、1932 年 2 月から隔月刊で発行した。

1931 年 4 月、エリーズは結核に罹患し、医師から 6 ヶ月の休養と安静を言いわたされ休職した。しかし彼女は 6 月 29 日付の母への手紙で、連日 10 キロを歩くニース通いを報告している (Madeleine, p.190)。その理由は、28 年にニースで「自然主義研究所」を開いたギリシヤ人保健衛生研究家ヴォルシヨ Vorcho (Basile Vorchopoulos) との出会いにあった。彼の自然療法による闘病生活がその後の彼女の自然主義的健康観と、食に関する考えを方向づけた。2 年後、彼女は医師から復職可能との診断を受けるが、35 年に退職を申しでている。

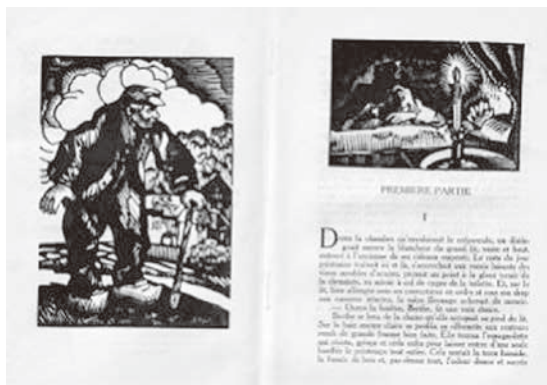


図 4 エリーズ・フレネ『束縛』挿絵

1932年8月、新教育国際連盟の第6回大会がニースで開催されたのを契機に、セレスタンは「サン・ポール教育会議」を企画した。100名近くの参加者のなかには、CELのメンバー以外にもロシアの作家ルウバキン Nicolai Roubakin などの著名な人物が含まれていた。その頃サン＝ポールでは子どもたちの「地域の研究」の様子を訝る一部の保守的な村民のなかに、セレスタンを偏向教育者とする疑念が生まれていた。そうした漠然とした反感が、共産主義を連想させる会議の参加者の来訪によって拍車がかかり、ついに中傷にまで発展する。

1933年4月、復活祭明けの月曜日の朝、セレスタンの解雇をかかげてデモ隊が学校に押しかけた。彼を擁護する子どもの親たちは学校の門を固め、双方の小競りあいにもで発展して憲兵隊が出動する事態になり、混乱を避けるためにセレスタンは自ら3ヶ月の休職を申し出た。

この騒動は新聞報道によって全国的に拡大し、右翼系やカトリック系の新聞がセレスタンを批判する一方、左翼系や共和派の新聞などが擁護する側にまわり、小説家のロラン Romain Rolland, ワロン Henri Wallon やフェリエールら新教育の推進者がセレスタンへの支持を表明した。それは1933年6月にセレスタンの転勤命令が決定されることで終結するが、このときセレスタンとエリーズは、独自に教育実践の実験校を開く決意をするのである。

4 ヴァンスの時代 (1935～1983年)

1935年9月の新学期、2人はサン＝ポールからほど近い小さな町ヴァンスにフレネ学校 *École Freinet* を開校する。エリーズの母と兄弟からの援助とセレスタンの退職金で、彼らは人里離れたピウリエ Pioulier と呼ばれる丘の約 7500 m² の土地と古い民家を手に入れた。丘の斜面には藪や林が点在し、周囲には自然豊かな風景が広がる場所であった。

学校にはドイツとポーランドから逃れてきたユダヤ人の子ども、パリ近郊の施設からきた障害児、友人の子ども、そして娘のマドレーヌを含む5歳から10歳の男女16名が集い、彼らと共に寝起きする学校生活がはじまった。すぐに子どもたちは印刷機を活用し、1ヶ月後の10月には、学校新聞 *Les Pionniers* 『開拓者たち』第1号を発行した。

その年、エリーズは最初の著書 *Principes d'Alimentation rationnelle* 『良識ある食事入門』を CEL から出版している。そのなかで彼女は人間本来の体躯に由来する食を重んじて、菜食と木の実や果実を勧めている。彼女の発案で、当時のフレネ学校の活動には食事以外にも、水浴や日光浴などの自然主義的で実験的な実践が含まれていた。

翌1936年にスペイン内戦が勃発すると、親交のあったスペイン人教師の依頼で戦争孤児を迎え入れ、38年には生徒数がスペイン人30名、フランス人16名の大所帯となった。この34年頃から39年までの時期を、フレネ教育の活動の一つの充実期と見ることができる。セレスタンは36年にはじまる人民戦線内閣の文部大臣ゼイ Jean Zay が組織した教育改革のための委員会に、ランジュヴァン Paul Langevin, ワロンといった新教育グループと、数人の CEL メンバーとともに参考人として参加した。彼と CEL は組織をあげて改革案にとりくみ、初等教育年限の14歳までの延長、C.E.P (初等教育修了免状) の廃止、公正な視学官制度の運用、学級の生徒数削減などの計画案をまとめた。

だが新教育グループとの討議をへて提出された法案は国会で成立せず、初等教育年限の延長は実現したが、C.E.P については内容の変更にとどまり試験は存続した。それでもセレスタンは、国家の教育改革への参加によってフレネ教育の教育方法と存在理由が認知されたと評価し

ている。しかしエリーズは、彼らの功績が公的な文書に明記はされなかったとして、政府の無理解への不満を書き残している⁴⁾。

エリーズの木版画が、南仏の共産党新聞 *Le Cri de travailleurs*『労働者の声』に、「Artiste du peuple (人民の芸術家)」の見出しで紹介されたのは、1937年7月10日である。それは投獄された農民たちを支援するための冊子に掲載されたもので、記者は田園生活の詩情と、胸を打たれる農夫の魂が、個性的に表現されていると評価している。

1938年に人民戦線内閣が倒れたのち、軍靴の高まりのなかで翌年には憲兵によってフレネ学校の印刷用紙が押収されることもあった。それでも第2次世界大戦の始まる5ヶ月前の39年4月には、約600名が参加した13回目の学校印刷会議がグルノーブルで開かれ、「学校演劇」「学校祭」「人形劇」「学校ラジオ」などの新たな実践が紹介された。しかし翌40年3月20日、セレスタンは「組合活動家」の危険人物として収容所に拘束され、エリーズは彼の解放に向けて奔走することとなる。勾留から約3ヶ月後にはドイツ軍がパリを占領して第三共和制が崩壊し、その後彼女自身も収監されるという情報もあり、彼女は学校を閉鎖し、41年4月6日の夜、娘のマドレーヌと母ジュリーを伴い、密かに亡き父の故郷であるヴァルイーズをめざして脱出した。半年後、およそ1年6ヶ月間の勾留を解かれたセレスタンは、3人の待つその地に合流する。

1943年からセレスタンは、ブリアンソン Briançon の対独レジスタンス組織マキ Maquis に参加し教育的役割を果たすことになる。2人はこのマキの人々に心を打たれて、*Images du Maquis*『マキの情景』(Ophrys, 1945)という詩画集を出版した〔図5〕。幾分手慣れた感じのする、伸びやかな線で描かれたエリーズの木炭画20枚とセレスタンの詩で構成されたものであり、彼女の表現は苦難に挫けない、人間の魂の強さを感じさせる。

1944年10月、2人はニース解放後にヴァンスに帰還したが、学校は建物が辛うじて残っただけで、CELのメンバーの連絡先も散失し、復旧は容易ではなかった。それでも45年2月には、戦前の *L'Éducateur Prolétarien*『プロレタリアの教育者』のタイトルが与える政治色を考慮して改題した機関誌 *L'Éducateur*『教育者』第1号を発刊し、同年CELを、翌年にはフレネ学校を再開した。47年ディジョンで戦後初のフレネ教育運動の会議を開き、教材の企画と共同購入販売の機関であるCELに対して、純然たる教育学研究の場としてのICEM(現代学校協同研究所)を新たに設立した。

1944年10月、2人はニース解放後にヴァンスに帰還したが、学校は建物が辛うじて残っただけで、CELのメンバーの連絡先も散失し、復旧は容易ではなかった。それでも45年2月には、戦前の *L'Éducateur Prolétarien*『プロレタリアの教育者』のタイトルが与える政治色を考慮して改題した機関誌 *L'Éducateur*『教育者』第1号を発刊し、同年CELを、翌年にはフレネ学校を再開した。47年ディジョンで戦後初のフレネ教育運動の会議を開き、教材の企画と共同購入販売の機関であるCELに対して、純然たる教育学研究の場としてのICEM(現代学校協同研究所)を新たに設立した。

1949年には監督ル・シャノワ Jean-Paulle Le Chanois によって、セレスタンをモデルにした映画「L'École Buissonnière (みどりの学園)」が製作され、翌年から世界各地で上映された。脚本はエリーズによるもので、*BT* (『仕事の文庫』)の100号(1950年2月)に掲載されているが、劇中に彼女が登場することはなく、テロップにもその名前は記されなかった。

1950年代から60年代前半は、フレネ教育運動のもっとも盛んな時代であったと言える。こ



図5 『マキの情景』表紙

の時期、CELの会員数は、エリーズの記述によれば2万人以上であった⁵⁾。ICEMの会議は46年から毎年復活祭の期間に国内各地で開催され、57年にはベルギーのブリュッセルでフレネ教育の国際的な活動団体である *Fédération Internationale des Mouvement de l'École Moderne* (F.I.M.E.M, 現代学校運動国際連盟) が設立された。

1966年10月、セレスタンが70歳で病死し、生まれ故郷のガに埋葬された。68歳のエリーズは彼の後を引きつぐが、69年にはCELとICEMの代表を降りて学校の運営に専念した。81年からは娘のマドレーヌが引きつぎ10年間在任した。のちに学校は国立となり、今日ではエリーズとセレスタンの業績を含めて国の遺産に登録されている。

1983年1月30日エリーズ死去。その亡骸はセレスタンが眠る墓に埋葬された。2月24日発行の週刊誌 *L'Éducation* 『教育』には、巻頭を飾る写真入りの3ページで記者クラナド *Serge Cranadeg* による追悼記事が掲載され、フレネ教育を高く評価するとともに、セレスタンと共に歩んだエリーズの生涯を賞讃した。彼女は学校近くの小さなコテージでほとんど世間に知られることもなくひっそりと旅立ったが、最後に目にしたのは寝室の壁を飾る数々の子どもたちの絵であったと伝えている。おそらく彼女には、子どもたちの声が届いていたであろう。

Ⅲ エリーズのフレネ教育における業績

1 フレネ教育における造形表現活動と「描画」

フレネ教育における学習では、子ども自身によって1週間の「*Plan de travail* 仕事の計画」の立案と評価が行われる。教師は子どもたちから生まれた疑問や関心に沿って、さまざまな研究課題を提示し、歴史、地理、物理、化学といった項目ごとに子ども自身がテーマを選ぶ。1週間で作文を3本ほど書き、文法と算数はそれぞれの能力にあわせて学習カードを利用して個別にとりくみ、継続的な手仕事は自分で選択して進め、自己評価をする。また長期的な研究を発表し、話し合うことを「*Conférence* 会議／研究会」と呼び、フレネ教育の実践の柱のひとつである。年間のプランと各コース（準備6, 7歳、初級7～9歳、中級9～11歳、第2課程14歳まで）のプランは教師が作り、それらはほぼ国のカリキュラムに合致する。

フレネ教育はスコラ的教育を完全に否定し、子どもがなにものにも強制されず、自らの興味・関心を土台にして自発性と自立性をもつことを全面的に保障しようとする。教師は、個々の子どもたちが生まれながらにもつ文化の豊かさへの欲求を、見逃すことなく促し、彼らに寄り添い励ます。セレスタンとエリーズはこうした教育方法を「*Méthode naturelle* 自然な方法」と呼んだ。

そのなかでエリーズが中心的役割を担ったのが、表現活動としての「*Dessin* 描画」であった。フレネ教育が確立していった時代の公立小学校で実践された「描画」は、幾何学的に図面上の正確さを追求するやり方から直観的に物の特徴を表現する方法へと変革されはしたが、依然として子どもの想像力には着目していなかった。エリーズは、自然な子どもの欲求から生まれる創造性を何よりも大切にして、子どもたちが思い通りに表現できるようにしたのである。

子どもの創造性が発揮されるのは、何ものにも強制されない環境においてであるというこうした認識は、同時代のオーストリアの美術教育者チゼック *Franz Cizek* との共通性が指摘できる⁶⁾。また、イタリアの教育者モンテッソーリ *Maria Montessori* の、子ども自身が選ぶ自

発的な活動が保証されてこそ、子ども本来の自己形成が成されるとする教育観にも⁷⁾、エリーズとの類似性が看取できる。しかしプロレタリア教師を自認するエリーズにとってアカデミー出身の芸術家であったチゼックは大きく異なる環境にあり、モンテッソーリについては、1932年の新教育国際連盟の会議で実際にその教育法の実演を目にして、やんわりとはあるが批判的な感想を残している⁸⁾。彼女がそこで用いられる特定の教具のどこかに強制的な印象を持ったとしても不思議ではない。先達とは言えども、エリーズがそこに権威の匂いを感じとっていた可能性は高い。

エリーズが、最初に子どもの「描画」について執筆したのは1930年11月の *L'Imprimere à l'École* 誌上で、「Le dessin: Première activité libre (描画: 最初の自由な活動)」と題して5ヶ月にわたり連載した。

彼女の子どもに対峙する基本姿勢は、「(赤ん坊の) 何かを伝えようとしている、あるいは、見返りを求めている数々の身ぶりや仕草に驚かされるように、初めての自然な表現である子どもの描画を、広い心持ちで受けとめなければならない (comme on s'étonne des premiers gestes qui ont une fin d'utilité ou de grâce, de même on doit accueillir avec bienveillance les premières manifestations spontanées que sont les dessins d'enfants.)」という、その文章での言葉に現れている⁹⁾。そして描画の活動を通して、子どもの欲求や創造しようとする意欲に教師が気づき、手を動かすことによる脳の活動と、表現による思考とを繰り返しつつさせることの大切さを説いている。彼女はまた、心理学者と教育学者がスコラ的でブルジョアであり、体制順応主義ゆえに、子どもの魂の直感的領域を見抜くことができないとも述べている¹⁰⁾。

連載を始めた頃、彼女の娘は1歳6ヶ月であり、当然、成長の推移を注視していたはずである。セレストンものちに雑誌『教育者』に掲載した論説で「赤ちゃんが、食事時のテーブルにこぼした粥を、手にしたスプーンでぐちゃぐちゃにした跡は、描こうとする最初の行為であり、言葉にならない最初の叫び声と同じように自然な表現である (Avec sa cuillère engluée de bouillie, le bébé trace sur la table les premiers graphismes qui sont déjà pour lui expression spontanée, comme les premiers cris qui précèdent la voix articulée.)」と述べ、それを「tâtonnement expérimental 実験の手探り」のひとつと捉えている¹¹⁾。それらを繰り返して、描画の成長段階を上がっていくというのが、2人の考える「L'apprentissage du dessin libre 自由な描画の学び」なのである。

エリーズは上で述べた論説を掲載したときから、同時に誌上で子どもたちの作品の送付を依頼している。読者である教師たちの多くが、求めに応じてそれらをエリーズに送り、彼女は作品に対する批評を添えて返送した。フレネ教育において「自由な描画」は、まだ文字を綴れるようになっていない子どもにとっての「自由な作文」として捉えられた。1930年代初頭はその教育運動の黎明期であったが、子どもの「自由な描画」へのとりくみは「自由な作文」と同様に、すでに活動の中核をなす教育方法であったといえよう。

エリーズの時代には、フレネ学校での「自由な描画」のとりくみは、毎朝実施される最初の活動である朗読の時間に行われた。子どもたちは、当番が前に出て朗読する作文や自選の文章を聞きながら、自由に、まさに思いのままに紙に描画する。それは、大人の会議などの際によく見られる、配られた資料の余白や裏に落書きするような感じのものである。そして、子どもたちの話し合いによって選ばれた「自由な描画」が版画として刷られる。

2 著書と雑誌

1938年にエリーズは *Le Dessin libre* 『自由な描画』という冊子を刊行した (*Brochures d'Éducation Nouvelle Populaire*, n°9)¹²⁾。そのなかで彼女は読者に、教師としての毅然とした態度を保持し、主体としての子どもと作品の芸術性を尊重し、子どもの表現を通して芸術の根源的な意味を見いだすことの必要性を述べている。

さらに彼女は、1959年に子どもの芸術に特化した雑誌 *Art enfantin* 『アール・アンファンタン (子どもの芸術)』を創刊する〔図6〕。その内容は子どもの「描画」以外にも、音楽や舞台劇、詩作など題材は多岐にわたっている。これは1950年代初頭に、ICEMに立ちあげた研究会との協力により実現したものである。彼女ひとりがフレネ教育運動の芸術的領域の発展の貢献者というわけではないが、彼女が強い牽引力を持っていたことは確かである。

同誌には、作家のコクトー Jean Cocteau や画家のレジェ Fernand Léger が賛辞を寄せている。レジェは、多くの芸術家がこの雑誌に魅了されてフレネ学校を訪れたといい、また「ここで宣言するものである。子どもの絵は、正真正銘の芸術である (Il est nécessaire de le proclamer: le dessin d'enfant est une chose de l'art authentique, valable.)」¹³⁾と謳った。

創刊号の裏表紙には、「Comité d'honneur 名誉委員会」として、南仏のガール Gard 県にあるアルベール＝アンドレ Albert-André 美術館の管理者で画家のブレ＝アンドレ Jacqueline Bret-André と、「アール・ブリュット」を提唱した画家デュビュフェ Jean Dubuffet、画家でタピスリー作家のリュルサ Jean Lurçat があげられ、次号からはコクトーや美術評論家のベッソン Gerge Besson をはじめ、著名な画家や作家が名前を連ねた。各地の子どもの芸術的活動の紹介や ICEM のメンバーによる記事、子どもの作品の写真など、カラーページも交えたその構成からは、この雑誌がフレネ教育運動で中心的に位置づけられ、ICEM で重要視されていた

ことがうかがえる。刊行はほぼ年間4回の頻度で、1981年発行の101号までつづいたが、エリーズが直接編集に関わったのは69年の50号までと思われ、それ以降は監修者として名前が残された。

同誌において彼女は、編集作業とともに論説を担当した。テーマは、教育学者や心理学者に対する批評や、現場の問題に直面する教師への励まし、芸術に対する彼女の考え、また子どもの教育にまつわる話題と様々である。それらの文章に通底するのは、既成の教育方法に対する批判と彼女のフレネ教育に対する自信である。そして、セレストアンと同様の子どもに対する愛情と眼ざしである。

エリーズは1963年刊行の著書 *L'Enfant artiste* 『子どもの芸術家』で、友好的な雰囲気満ちた環境と子どもから信頼される教師のあり方、子どもの意欲をもっとも尊重した自由な創造活動について述べている。また子どもが自らの作品を説明



図6 『アール・アンファンタン』
創刊号 (1959年12月) 表紙

し、子ども同士で質問や意見交換することで育まれる認識が、彼らの成長に心理的な影響を及ぼし、教育的のみならず人間的レベルにおいて重要であると説き、そのうえで、それぞれの子どものスタイルになる力強い特徴や、個性的な細部の大切さを語っている。教師は、あるがままの子どもを受け入れ、そして子どもに導かれるのである。

ところでエリーズは、その著述において度々「Pompier (ポンピエ)」という言葉を用いる。一般には「消防士」を指すが、別に「大時代な作風や、画家(作家)」といった意味をもつ単語である。彼女がそれを使うのは後者のニュアンスをふまえたものであり、既成の権力にしがみつき、それを振りかざす人というだけでなく、柔軟性に欠けた物の受けとめ方しかできない人、あるいは頑固で、子どもへの影響を何も考えない人という意味にも読みとれる。*Dessins et peintures d'enfant*『子どもの描画と絵画』(*Bibliothèque de l'École Moderne*, n°16, 1962)では、「Chassons le Pompier (ポンピエを追い払おう)」、『子どもの芸術家』では「Un ennemi: le pompier! (敵、いわゆるポンピエ!)」という章があり、いずれも手厳しい。

彼女は、当時に流行していた挿絵入りの子ども向け百科事典を例にとり、大げさでけばけばしいカラフルな絵より、芸術家である子どもの創造したものが好ましいことを、当の子どもや先生に納得させるのは難しいと述べている¹⁴⁾。彼女は、ポンピエと対極をなすのは「線やレイアウト、アラベスク模様に見つけることができる、個性的で感動に満ち独創的なものである (c'est la création originale, inédite, chargée d'affectivité et de caractéristiques personnelles dans la ligne, dans la mise en page, dans l'arabesque.)」として、ポンピエを回避するには、「子どものために、世界の鮮明なヴィジョンへたちもどらなければならない (il faut pour l'enfant revenir à une vision claire du monde.)」という¹⁵⁾。

彼女が子どもの「描画」や「絵画」の表現において注目したのは、独特な細部へのこだわりと、そこに醸しだされる装飾性と詩情性であった。また、子どもの独自の物の見方や、それによる個性的なスタイルと言える。そして、日々に繰り返される「自由な描画」の積みかさねが、表現の多様性や画面構成に対する能力に、おおきく作用するとしている。

IV いくつかの証言

今日の学界においてエリーズに注目する数少ない研究者、1957年生まれのご Henri Luis Go は、「Élise Freinet, une pédagogue de l'art enfantin (エリーズ・フレネ、子どもの芸術の教育学者)」(*Carrefours de l'éducation*, n°41, 2016)において、彼女に芸術教育者として賛辞を呈している。また彼の教え子のリオンド Xavier Riondet も、エリーズに言及しているひとりである。筆者は、彼が2015年に発表した「La vie et les convictions d'Élise Lagier-Bruno (1898-1983): Une silence problématique pour appréhender la pensée critique des Freinet? (エリーズ・ラジエ＝ブルノの人生と信条: フレネ夫妻の批判的な思想を理解する際の問題のある沈黙?)」の要旨を読んで、狂喜乱舞したくなるほどの深い共感をおぼえた¹⁶⁾。

それは、本論文を執筆する動機である、エリーズに対する関心の低さについて同様の印象を述べているからである。彼はそのなかで、フレネ教育における彼女の存在意義を「フレネの思考の装置であり原動力 (une machine de pensée, la machine de Freinet)」と評し、まさに「彼女はまさに自ら陰に隠れることで (とりわけ、1949年の映画『みどりの学園』の台本に

において)逆説的に貢献し、1966年のフレネの没後、彼の歴史的ライターとなった(elle contribua même paradoxalement à sa propre éclipse (notamment dans l'écriture du film *l'École Buissonnière* en 1949) en devenant après la disparition de Freinet en 1966 la principale historiographe de Freinet.)」と述べている。それは彼女の成果を、作家でも、あるいは「重要人物」の仕事でもないとする批判的考えに向けたものである。

ここで彼が指摘するエリーズに対して否定的な判断をしている人物とは、1950年から52年までCELの事務方としてセレスタンと行動を共にしたバレ Michel Barré のことである。セレスタンの死後、その役職を引き継いだエリーズがわずか3年後の69年にフレネ学校の運営に専念した時、バレは彼女に代わってCELの責任者に就任し、15年間その任に当たった。近年では、L'association Amis de Freinet (フレネ教育研究会)の重要なメンバーのひとりであった。バレは2015年夏に亡くなったが、エリーズを強く批判する彼の存命中は、研究者も彼女に注目し、ことさらにその活動を評価するのが難しかったであろうと想像できる。

バレはセレスタンについて著わした、*Célestin Freinet: un éducateur pour notre temps, Tome I, II*『わたしたちの時代の教育者:セレスタン・フレネ』上下巻(PEMF, 1995-1996)の著書のなかでエリーズに対して、否定的評価しかしていない。上巻にはエリーズのドレ賞受賞作の図版が掲載されているが、18行の簡単な経歴紹介だけであり、下巻では彼女の実践がフレネ教育に貢献するものではなかったと痛烈に批判している¹⁷⁾。

そうした否定的な見解は、彼女の子どもの芸術的表現にむけた活動に対しても同様である。バレによれば、論理的な指導方法もなく場あたりの声かけによって、子どもにステレオタイプな絵を描かせていたのがエリーズなのであり、フレネ教育にそぐわない作品評価をし、子どもの絵を独断で修正し、さらに賞めあてのコンクールを企画したと述べている¹⁸⁾。

確かにエリーズは、送られてきた作品に「優、良、可(Très bien, Bien, Passable)」を記入しコメントを添えて返送していた。しかし2009年までフレネ学校では子どもたちがアトリエで制作した作品を返却せず、「みんなのもの」として学校で保管していたといい¹⁹⁾、その考え方がフレネ教育を推進する他の学校でも共有されていた可能性は大きい。彼女による評価や批評も、作り手である子ども自身が目にするのではなく、ただ教師の指導力の向上のためのものであったとは考えられないだろうか。コンクールという競争形式で作品収集が行われたというのも、直接子どもたちに呼びかけて競わせていたのか疑問である。

バレは、『アール・アンファンタン』に名前の記載がある有名芸術家とエリーズの関係にも疑問を呈して、そこに親密な関係や共同作業はなかったと断じている²⁰⁾。しかしICEMの「芸術と表現グループ」の責任者であるイエレミアディ Katina Iélémiadisによれば、「当時、ガストン・シェサック Gaston 50Chaussacの妻カミーユ Camille が公立小学校教師であり、その関係で、彼と親交のあったデュビュフェが寄稿している」という²¹⁾。デュビュフェは1955年からフレネ学校のあるヴァンスに居住していた。エリーズと芸術家たちにどの程度の親交があったかは不明だが、彼女が最も望んだのは自身の個人的名声を高めるのではなく、芸術家たちのフレネ教育への純粋な理解と、より広いフレネ教育の普及だったのではないだろうか。

一方、バレと同様にフレネ教育研究会員であり、1948年からICEMに参加し、フレネ教育を実践したル・ボエ Paul Le Bohec は、同研究会のサイトに「エリーズの役割(Le rôle d'Élise)」と題した一文を寄せている。彼によれば、「エリーズのはたした役割は非常に重要で、彼女がいなければフレネ教育運動は存在しなかった(Le rôle d'Élise Freinet a été d'une

importance considérable. On peut même se demander si, sans elle, le Mouvement aurait existé.)」という。そしてエリーズとセレスタンについて、「彼らの関係は、常に対話で成りたち、ある時は相反し、ある時は補いあっていた (Ils étaient en relation dialogique, c'est à dire complémentaires, contradictoires et opposés.)」と述べている²⁹⁾。

V おわりに

エリーズは、長年芸術に関心を寄せ自ら絵を描きつづけてきた。彼女は芸術において最も重要なものが、生の躍動であると理解していたからこそ、子どもの芸術教育の基礎に自由な表現（自由な描画）をおいた。それを保証するには学校そのものを変える必要があった。

彼女は、教師が子どもに描くテーマや描き方を押しつけることを否定し、子どもの自発的な描画への道筋を整え、子どもの何気ない描画（自由な描画）の重要性を着眼点にして、描こうとする意欲と人格を何よりも重んじた。その上で子どもが作品を見せあい、相互に話しあえる、また教師と平等な関係性を持ち、生徒全員が自然に安心して自己表現（自由な描画、作品の解説や批評だけにとどまらず、あらゆる心情も）できる環境を創り出したのである。

エリーズが子どもの芸術的な表現活動でめざしたものは、描く技術の修練ではない。「仕事」のなかに生まれる自然な表現を通して、彼らを健全な人間形成と芸術や文化の理解へと導くことにあった。教師もまた、フレネ教育を導入して子どもの芸術を理解する努力をすることで、芸術や文化への認識を深める。この信念にもとづいたエリーズの描画に対する実践は、子どもの芸術教育を考察するうえで充分、注目にあたいする。

人間は、本来持つ精神性を抛りどころとして活動し、他者との信頼と共感を得て、個々の個性が磨かれ、社会の一員として成長していくものである。より充実した人間形成に最も大切な子どもの時期にこそ、子どもを主体とし、自然な成長を妨げない教育が望まれるとしたのである。そこにフレネ教育の本質がある。またそうした教育観がプロレタリア的思想のもとに育まれ、さらに文集という印刷メディアを積極的に活用し、そのなかで芸術的表現活動が重要な役割を担っていた点は、美術教育の可能性を考えるうえでも非常に興味深いものである。

フレネ学校は、今もかわらずヴァンスのピウリエの丘陵地にある。来訪者を交えた行事などに使用される広場には、エリーズと子どもたちが制作したモニュメントがあり〔図 7〕、点在する建物を結ぶコンクリートの小道には、子どもたちが刻んだ描画が残されている〔図 8〕。また資料室に保管された彼らのテラコッタや陶板作品の数々も、エリーズの多彩なとりくみを彷彿とさせる〔図 9〕。

彼女の美術教育活動における重要な足跡として、クルセグル Coursegoule に開設された Le musée d'Art Enfantin（子どもの美術館）がある。正確な開館期間は記録されていないが、1950年代後半から10年ほど運営されていたと思われる。古い建物を再生利用したその小さな美術館は3室で構成され、



図7 現在のフレネ学校の広場



図 8 フレネ学校のコンク
リート通路に刻まれた子ども
の描画



図 9 子どものテラコッタ
作品



図 10 フレネ館の正面

フレネ学校の子どもたちの作品が整然と並べられていた。壁を飾っていたのは、モザイクや陶板のレリーフ、布製のタピスリーである。ヴァンスから約 20 キロ離れた山間地の小集落であるクルセグルは交通が不便にもかかわらず、多くの訪問者を迎えた時、彼女は記述している²³⁾。

現在は建物の入口の外壁を装飾したテラコッタのレリーフ (3.5m × 2.2m) だけが、La façade de Freinet (フレネ館の正面) [図 10] という名称で、史跡として残されている。その作品はフレネ学校の 14 歳と 16 歳の 2 人の生徒による *De la bête à l'homme* (獣から人間に) という構想にはじまり、子ども 10 名ほどが参加して制作されたものだ。それは半世紀を経た今も、あたかも古代の遺跡を眼前にしているような、人間の生命と平和への祈りを想起させる存在感を放っている。

現在もフレネ学校では個人計画表が使用され、学校文集が年に 5 回発行されている。筆者 (秋好) が 2018 年に視察した際にも、教室ではエリーズとセレスタンの時代と同様の印刷機が日常的に使われていた [図 3]。学校生活全般において、子どもの自主性と自然な学びが保障され、個人が尊重されている様子が感じられ、2 人の教育理念が脈々と受け継がれていることが確認できた。彼らは 20 世紀の初頭から、フレネ教育の方法論を一地方の小学校の実践に留めることなく、教育界や社会にまでも広く継続的に発信しつづけた。エリーズとセレスタンの死後半世紀経った今日でも、フレネ教育の理想は、世界各地でその輝きを失ってはいない。

フレネ教育研究会は 2018 年からホームページを刷新し、1953 年に開催した子どもの描画のコンクールで選ばれた作品 74 点の画像など、エリーズに関する新たな資料をつぎつぎに公開している。またヴァルイーズでは関係者の研究グループが結成されて、レジスタンスの歴史に付随するフレネ教育の関連情報の蒐集と展示がなされている。そこは彼女の描いた「*Images du Maquis* (マキの情景)」の舞台であり、第 2 次世界大戦中にセレスタンとともに滞在した父方の実家が現存する。2018 年 7 月 9 日～ 8 月 17 日には同地の図書館で "Exposition de dessins réalisés par Élise Freinet" と題された彼女の挿絵展が開催され²⁴⁾、さらに同年 10 月

にはフレネ教育研究会および ICEM の協力により、フランス郵政公社からフレネ夫妻の記念切手が発行された。その切手はベルニエ *Frédérique Vernillet* の作画による、2人が対等に並んで表された肖像画である。つまり、フレネ教育の象徴は、セレスタンとエリーズの好一对であるという明瞭な意図が読みとれる。

このように、セレスタンの陰に隠れていた、エリーズに対する社会的な再評価の動きは、はじまったばかりである。

注

*本論文は秋好が全体の執筆をしたのち、田中が加筆・修正し、その後、2人で改めて内容を検討して仕上げたものである。なお、フレネ教育で使用される用語については、美術教育・美術史的な視点をふまえて、日本語での先行研究とは異なる訳語を用いているものもある。

- 1) Madeleine Freinet, *Élise et Célestin Freinet: Souvenirs de notre vie, tome I, 1896-1940*, Paris: Stock, 1977, p.92 参照。
- 2) エコール・アーペーセーについては、*ABC, magazine d'art*, n°31, juillet 1927 の巻末に掲載された同校の広告"Si vous pouvez écrire vous pouvez DESSINER"を参照。
- 3) "2e Grand Prix Gustave Doré", *ibid.*, pp.175-177.
- 4) Élise Freinet, *Naissance d'une Pédagogie Populaire*, Paris: F. Maspero, 1968, p.319.
- 5) *ibid.*, p.356.
- 6) 石崎和宏「フランス・チゼックの美術教育とその方法に関する研究」『筑波大学芸術教育学』第5号(1993年)117～118頁。
- 7) 中山幸夫「マリア・モンテッソーリの教育学思想の源泉」『敬愛大学研究論集』第52号(1997年)404頁。
- 8) Élise Freinet, *op. cit.*, p.162.
- 9) *L'Imprimerie à l'École*, n°38, janvier 1931, p.101.
- 10) *L'Imprimerie à l'École*, n°39, février 1931, p.137.
- 11) Célestin Freinet, "Le Dessin", *L'Éducateur*, n°20, septembre 1963, p.3.
- 12) Élise Freinet et M. Davau, *Le Dessin libre*, Vence: L'Imprimerie à l'École, 1938.
- 13) Fernand Léger, *Art enfantin*, n°5, décembre 1960.
- 14) Élise Freinet, *L'Enfant artiste*, Cannes: Robaudy, 1963, p.139.
- 15) *ibid.*, p.64.
- 16) http://2015.ische.org/wp-content/uploads/2015/07/ische2015_abstract-book.pdf [2018年10月25日閲覧]。2015年6月24～27日にトルコ、イスタンブールで開催された「ISCHE 37 — International Standing Conference for the History of Education: Culture And Education」の Abstract Book (PDF版), pp.40-41.
- 17) Michel Barré, *Célestin Freinet: un éducateur pour notre temps, Tome II*, Mouans-Sartoux: PEMF, 1996, pp.171-174.
- 18) *ibid.*, pp.140-141.
- 19) 松本アリサ「フランスにおける幼稚園・小学校の美術教育についての一考察」『湊川短期大学研究紀要』第50号(2014年)93頁。
- 20) Michel Barré, *op. cit.*, pp.141-143.
- 21) <https://www.icem-pedagogie-freinet.org/node/12689> [2018年2月12日閲覧]。
- 22) Paul Le Bohec, "Le rôle d'Élise", *Bulletin des Amis de Freinet*, n°85, juillet 2016, p.17.
- 23) Élise Freinet, "Le Musée d'art enfantin de Coursegoule et les autres musées à venir",

L'Éducateur, n°1, septembre 1964, pp.11-12.

24) <http://vivreettravaillerenecrins.simplesite.com/433846961> [2018年10月30日閲覧]。

参考文献

- エリーズ・フレネ 『フレネ教育の誕生』 名和道子訳 (現代書館, 1985年)
 セレスタン・フレネ 『手仕事を学校へ』 宮ヶ谷徳三訳 (黎明書房, 1980年)
 セレスタン・フレネ著, 宮ヶ谷徳三著訳 『仕事の教育』 (明治図書, 1986年)
 セレスタン・フレネ 『フランスの現代学校』 石川慶子・若狭蔵之介訳 (明治図書, 1979年)
 W.ボイド, W.ローソン 『世界新教育史』 国際新教育協会訳 (玉川大学出版部, 1966年)
 パウル・ナトルプ 『ペスタロッチ』 乙訓稔訳 (東信堂, 2000年)
 梅原峻 『フランス共産党史』 (現代の理論社, 1967年)
 Rana Al-Zaben "Ethnographie des pratiques militantes dans le mouvement Freinet", Thèse présentée pour obtenir le grade de docteur l'université de Bordeaux, 2014.

Sur Élise Freinet

— Pionnière de l'Expression Artistique Infantine dans la Pédagogie Freinet —

AKIYOSHI, Ayako and TANAKA, Shuji

Abstract

Élise Freinet (1898-1983) était une institutrice française et l'épouse de Célestin Freinet (1896-1966), le fondateur de la pédagogie Freinet. Par ailleurs artiste peintre, elle comprit l'importance pour la pédagogie d'une expression spontanée de l'enfant. Dans la revue *Art enfantin* qu'elle fonda en 1959, se reflètent avec force ses convictions sur l'art et l'éducation des plus jeunes. Ayant remarqué « l'expression libre » des enfants, elle a valorisé l'inventivité d'un « dessin libre » pratiqué à l'école au quotidien. Dans le cadre de la pédagogie Freinet, il était considéré que l'enfant développe sa créativité et construit sa personnalité à travers une activité enracinée dans le quotidien, pratique appelée « méthode naturelle ». Élise Freinet n'a pas seulement été la compagne dévouée de son époux Célestin, elle a aussi contribué, dans le cadre de la pédagogie Freinet, au progrès du mouvement éducatif, en donnant toute sa place au champ de l'expression artistique chez l'enfant.

【Key words】 pédagogie Freinet, Élise Freinet, Célestin Freinet, éducation nouvelle, École Freinet